

前田本『枕草子』のために

金 井 利 浩

〈キーワード〉 枕草子 諸本論 前田本 汎諸本論 二つの枕草子

一 枕草子汎諸本論へー前田本のためにー

諸本論は、かつて古態の追究をその使命としていた。代表本文とか最善本とか呼ばれるその一本の追尋、さらには原形・原態の復元や校訂作業といった営みに、いかに多くの熱情や労力が注がれてきたことであつたろうか。

事は、むろん『枕草子』においても例外ではなかった。雑纂形態本か類纂形態本か、三巻本か能因本か、そうした一定の議論が、言うまでもなく、原作ないし原形・原態は一つであるとする発想のなかで営々と行なわれてきた。

前田本は、諸伝本のなかでは書写時期の最も古い写本ではあるが、能因本と堺本とを合成して編纂された改修本ないし再構成本である——この、こんにちのほとんど定説と言つてよいであろう見取図も、したがって、というべきか、しかるに、というべきか、当然のことながら、そうした「発想」において描かれたものであつた、ということとは、ここで改めて確認しておいてもよいだろう。

前稿^①でも少しく顧みたが、その見取図の描破を主導した楠道隆「枕草子異本研究（上・下）——類纂形態本考証——」（『國語・國文』一九三四年六・七月）が、当初に立てた仮説すなわち「前田家本は伝能因本と堺本とを底本として集成して作られた後人による改修本である」との見立てに対して、前田家本が参照した伝本には三巻本も含まれているとの指摘とともに、当該仮説における「伝能因本」と「堺本」とを、それぞれ「現存能因本の源流本」「現存堺本の源流本」へと修正すべきことの示唆^②を受けて、前田本編者が使用した異本の中には三巻本もあったと考えるのが妥当であると〈転向〉するほかなかったという事実、さらに言えば、右の、三巻本をも参照していたはずとの指摘がなされたその時点で事実上瓦解していたはずの仮説が、ついに取り下げられることも、周囲から適

正適確に批判されることもないままに、むしろそうなることが当然であったかのように定説ないし定説に準じる位置へと迫り上げられていった事実もまた、前田本のためには想起しておくに如くはないだろう。

それにしても、右の「仮説」に対する異論にしてからが、「源流本」という、およそ夢想のなかにしか定立し得ない写本を導き入れることで修正を逼るほかなかったように、『枕草子』の諸本論はその総てが、原作ないし原形・原態は一つであるとする発想に縛られつづけてきたのである。はたして前田本は、諸伝本中に独立の地位を保ち得る資格を与えられず、お題目のようになりかえされる、それでも最も興味深い最古唯一の貴重な古写本ではある、といった、まさに付けたりの体を以て良しとするかのような扱いに甘んずるほかなかったのである。かの『校本枕冊子』を編み、『枕冊子本文の研究』を著した田中重太郎の、「前田家本に対する注解は、旧著『^{案前}枕冊子新註』（昭和二六年九月刊）以上にくわしいものを将来出す意志はないし、堺本に対しての注釈もいまのわたしの計画にはない⁽³⁾」との言が象徴するように、「異本には独特の疎外性が遺存⁽⁴⁾」すること、『枕草子』の伝本研究においても例外ではなかったのである。

しかしながら、諸本論をいったん突き放してみると、類纂形態が原初ではなかったとして、ならばその形態本の生成の由縁は、那辺に求められるのであろうか、あるいは、さらに溯って、『枕草子』に録された「―は」「―もの」の創生の現場は、いかようなものであったのだろうか、という素朴な疑問がわいてくる。たとえば、中宮定子が「○○は？」と問い、「××もの」を挙げよ！と迫る、これに清少納言が応じ、挙例してみせる、そのようなサロンにおける対話をそのままに写したものが類聚章段ではなかったか、あるいはまた、とある日に定子からその集成を下命され、雑纂形態を清女みずからが再編して成った問答集・応答集が類纂形態本の原姿ではなかったか、と問い得る可能性の下に『枕草子』を据え直してみると、旧来の諸本論における雑纂形態か類纂形態かといった窮屈な二項対立はにわかには雲散し、その本文は、いわば〈二つの枕草子〉という観点から俯瞰することができであろう。

かつて能因本の校注・訳を果たした松尾聰の「補いのことば⁽⁵⁾」が想起される。林和比古「枕草子『わろきもの』詳論―三卷本は原初稿本か別人改作稿か―」（大阪大学教養部『研究集録』第二十一輯）に触れて、次のように陳べていた。

通説は、三卷本が作者の初稿本なら能因本は再稿本、前田家本・堺本は後人の合成本ということであるが、（…）個々の章段についてみれば、そう簡単にはわり切れない節々が多くて、多分に問題は今後に残されているのである。たとえば、近年、林和比古博士は、（…）堺本は原稿的な本、能因本は再稿的な本、三卷本は上記の二本を以って別人が改作した本であることを、詳細

に本文を再吟味しつつ主張しておられる。博士の主張を論破して通説を堅持しおおすことができるかどうか、（…）おそらくそれへの道は必ずしも平坦ではあり得ないであろう。（…）／そんなわけでどの本が最も原作者の原本に近いかの結論は急ぐわけにはいかないようである。

ここに、いわば枕草子汎諸本論の萌芽はあったものと観る。雑纂形態本へと衆目が集まるなかで喪われた（もう一つの枕草子）は、取り戻されて然るべきである。実態として、それを語る言葉の真の意味において紛れなき「最古」の本文を有する前田本と向き合わずして『枕草子』を読んだことにはなるまい。

前稿につづいて以下に取りあげるのは、これまでの諸本論によつては説明のつかぬ、もしくはその説明の論理を裏切る前田本『枕草子』の諸段である。

二 前田本を読む／前田本で読む／二〇六段の場合

まず凡例を掲げる。前稿とは一部相違するところがある。

「凡例」

- 一、本文は、尊経閣叢刊丁卯歳配本『前田本枕草子』（育徳財団、一九二七）に拠り、次のような方針によつて翻刻する。
- 1 仮名は現在におこなわれる字体により、漢字は常用漢字表にあるものについてはその字体を使用する。
- 2 段落を切り、句読点を加点する。
- 3 会話の箇所は「」でくくり、会話文中の会話は『』でくくる。
- 4 仮名には必要に応じて漢字を当て、もとの仮名は読み仮名（ふりがな）のかたちで残す。なお、その仮名が歴史的仮名遣いと相違する場合には、その仮名の直下に（ ）でそれを補記する。
- 5 漢字には、必要に応じて読み仮名を（ ）に入れて付す。また場合により、漢字を仮名に開き、もとの漢字を傍記する。
- 6 漢字が動詞の場合、適宜、送り仮名を補い、その仮名の右傍に圈点（・）を付す。

7 当て字の類は、一般におこなわれる表記に改め、もとの当て字はふりがなの位置に残す。

8 仮名遣いは、底本のままとし、本文が歴史的仮名遣いに一致しない場合には、() でそれを傍記する。

9 語の清濁については、近年の研究成果を参照して、これを区別する。

10 反復記号「、」「〈」は適宜仮名に改め、当該の記号はふりがなの位置に残す。

二、通釈は、本文の意味するところを現代日本語表現をもって示す。

〔二〇六〕⁽⁶⁾

【本文】

六月廿余日ばかりに、いみじう暑かはしきに、蟬の聲、せちに鳴き出だして、ひねもすに絶えず、いささか風のけしきもなきに、いと高き木どもの木暗き中より、黄なる葉の一つづつ、やうやうひるがへり落ちたる見るこそ、あはれなれ。「二葉の庭に落つる時」とか言ふなり。

【通釈】

六月の二十日過ぎころに、ひどく暑苦しいなかで、蟬の聲が、ひたすらに鳴き始めて、一日中絶えず、少しも風が吹くようすもないなかで、とても高い木々の薄暗い中から、黄色い葉が一枚ずつ、しだいに翻り落ちているのを見るのは、しみじみと趣深い。「木の葉が一枚また一枚と庭に舞い落ちる時節になった」などと漢詩にも歌っているようである。

まず、当章段は、三巻本・能因本には存しないことを確認しておきたい。そのうえで着目したいのは、小異が散在しながらもほぼ同内容を伝える堺本〔二〇〇〕が、その掉尾の一文を「秋の露おもひやられて、おなじ心に」と、大きく異にしている点である。

見られるとおり、掲出した前田本のありようは、前田本は能因本と堺本の合成であるといった論理ではいかんとも処理しがたく、まさに仮想体としての「能因本の源流本」なり「堺本の源流本」なりを持ち出さねば説明のつかぬ典型例であったと言ふべきだろう。さて、そうした旧説の理窟にすなおに従えば、当の「源流本」にあった『「二葉の庭に落つる時」とか言ふなり』を前田本こそが記し伝え、現行の堺本はそれをなにくえか改変せしめて今日に及んでいるということになるはずだが、山中悠希によれば、①堺本本文は『白氏文集』卷十二所収「長恨歌」中の詩句「… 春風桃李花開日 秋雨梧桐葉落時 …」を指していると考えられ、②前田本の

直接的な引用は、落葉という言語状況に引かれて白詩の類似場面を注記的に加えているだけというふうにも見え、あるいは編纂者ないし書写者が堺本の「秋の露」よりも分かりやすい別の白詩すなわち「新秋」の一節を引いたことが考えられる、というのである。いったい、前田本の引く「一葉の庭に落つる時」との詩句に夙に着目した池田亀鑑⁸は、それが『白氏文集』卷十八所収「新秋」と題する五言律詩、

二毛生鏡日（二毛の鏡に生ずる日）

一葉落庭時（一葉の庭に落つる時）

老去争由我（老い去ること争^いでか我に因らむ）

愁来欲泥誰（愁い来ること誰にか泥せんと欲す）

空銷閑歲月（空しく閑歲月を銷し）

不見旧親知（旧親知を見ず）

唯弄扶床女（唯だ床を扶する女を弄し）

時時強展眉（時時強ひて眉を展ぶ）

この傍線を施した第二句であることを指摘し、さらに、堺本の同位置における表現が前田本とは異なることを不審とした池田⁹は、その表現「秋の露おもひやられて…」にもまた「古詩の引用がある」として、やはり『白氏文集』は卷二十所収「逢^三張十八員外籍」中の「旅思正茫茫／相逢此道傍／晚嵐林葉闇／秋露草花香」が典拠かと説いていた。

実は先の山中が指摘した①は、この池田の説いたところへの批判説として提示されたものであったのだけれども、翻って、「秋の露おもひやられて、同じ心に」とは、典拠ありとするに足る表現であろうか。ましてや、山中が自身の指摘した「秋雨、梧桐葉落時」そのままで典拠たり得ぬとして、異本の伝える「秋露…」に拠ったのだらうとする窮屈な手続きを経てまで典拠とする要はあったのであろうか。立ち返ってみるに、典拠だとする詩句「春風桃李花開日／秋雨梧桐葉落時」は、「思い出すのは、春の風に桃李^{すもも}の花がほころびる夜に二人で過^{あわ}ごしたと、秋の雨に梧桐^{あわぎり}の葉が落ちる時に語り合ったこと」くらいに解されようが、そもそも、その「秋の雨に」が「秋の露に」では、句意・句脈を形成し得ぬのではあるまいか。

かくて、堺本の「秋の露おもひやられて、おなじ心に」は、章段冒頭の暦日「六月廿余日ばかり」とにわかには打ち合わせぬことも

相俟って、不審の遺る憾み無しとしないのである。もし、それでも文意を通そうとするのであれば、ひらひらと舞い落ちてしまった黄色い葉の上に置くはずであった秋の露のことがおのずと想像されて、つい露と同じ気持ちに…、くらいに解することになるだろうか。ともあれ、ことさらに典拠を求める必要はないものと考えてのだが、いかがであろうか。

一方の前田本は、右に総体を引いた「新秋」自体をも併せ参照するにつけ、本文の表現と引用の詩句のそれとが相呼応して間然するところなく、さらに細部について言えば、「六月廿余日ばかり」の晩夏を描く文脈に「新秋」を主題とする詩の一節を導き入れるにあたり、その符節を合わせる要あるを知ればこそ「…とか言ふなり」との婉曲靡化の辞を用いるという、文脈・文辞整調への細やかな神経の介在さえ指摘し得るのである。

よって、百歩譲って堺本の当該の表現が白詩を典拠としているとしても、畢竟、それが同じ類纂形態本内において前田本のそれに先行しているとは見做し得ないのであって、言い得るところは、類纂形態本には記し留められることのなかった当段を、なにゆえか類纂形態本は有し、ことによっては堺・前田両本ともに白詩との聯関を指摘し得るなかで、前田本こそは、白詩からの確かな引用を含みこむ短文のなかで「六月廿余日ばかり」の「あはれ」なるありようを見事に描ききっているという事実に尽きるであろう。

ただし、その事実はまた、堺本の本文に付された注記が本行本文文化したものと見て前田本を貶めることの非と、前田本は能因本と堺本との合成本であるとの旧説による枠取りの非とを、ここに改めて炙り出してもいるのである。

三 前田本を読む／前田本で読む（二二七段の場合）

（二二七）

【本文】

十二月十日の月いと明かきに、日ごろ降り積もりたる雪の、凍み固まりたるが、空はやみたれど、なべて白く見えわたりたるに、直衣いと白く、指貫に濃き人の、色々の衣どもあまた着て、

【通釈】

十二月十日の月がたいそう明るいときに、ここ幾日も降り積もった、凍って固まった雪が、空からは降り終えているけれども、あたり一面に白く見えているなかで、直衣はたいそう白く、指貫には濃い紫で、

かたがたの袴 軾に踏み出だしたるが、かたはらに白き衣ども、濃き柳のあざやかなる上に着て、簾高やかに上げて、里へまれ、もしは、夜のほど忍びて出づるにもあれ、相乗りたる車の道のほどこそ、をかしけれ。

例はいときたなげに見ゆる家どもも、雪に面隠して、銀を葺きたるやうに、おしなべて見ゆ。軒の端々は、垂氷の長く短くつやめきて見えわたるなど、いとをかしと見ゆるに、「月千里に明らかなり」といふことを声のかぎり誦じたるは、さらに琴・笛の音よりもをかしく、めでたし。

若き人の、髪うるはしく飾りたるが、搔練のつやにもわかれず、額髪のはさまより見えたる面つき、いとふくらかに、頤の下ものより殊に白く見えたるなど、鴟の尾の方より射し入りたる月影に見るかひあれば、片つ方の袖どもは一連のやうに貫きながら搔き寄せて、ものなど言ひ行くは、千夜も尽くしつべくおぼゆるわざなり。

年若い、顔にくげに、鬢などしたりと、なほそのをりにさだに相乗る人あらば、飛びつきぬべき心地こそすれ。わいても、人やりならず、「あな、心づき」など見おこせむ尻目こそ、下心地わびしかりぬべけれ。

いろいろな色の衣をたくさん着て、それぞれに片方の袴が軾のところまで踏み出してしまっている男が、その傍らには女が白い着物などに、濃き柳襲のあざやかなのを上に着て、簾をいかにも高く上げて、女が実家へ戻るのであれ、あるいは、男が恋人との逢瀬を楽しむべく夜のうちにこっそりと外出するのであれ、同乗した牛車の道すがらというものは、趣深いものである。

いつもはたいそう見苦しく見える家々も、雪で表面を隠して、まるで銀で屋根を覆ったかのように、一様に見える。軒の端は端で、氷柱が或いは長く或いは短くつやつやと光って見渡されるなど、いかにも趣深いと見えるなかで、「月千里に明らかなり」という詩句を誰かが声を限りに吟誦したのは、またいつそう琴や笛の音よりも趣深く、すばらしいものである。

若い、髪を端麗に調えた女が、搔練の光沢にも劣らず、額髪の間から見えた顔つきは、たいそうふつくらとして、頤の下は、何にもまして格別に白く見えたのなどが、牛車の後部の鴟の尾のほうから射し込んだ月の光に照らされてすばらしく見えるので、互いの片方の袖はことさら一続きのように通して相手を抱き寄せて、おしやべりなどしながら牛車にゆられて行くのは、幾夜にもわたってそうしてしまいたく思われる次第である。

年をとり、顔はみにくくて、入れ毛などしていても、やはりもとのままにその折にそうでさえ同乗してくれる人がいたら、きつと飛びついてしまいいそうな気持ちがある。とりわけ、自分から、「ああ、いい感じ」などとこちらを見るような視線は、内心せつなくなるにちがいない。

まず、当段に対応する三巻本・能因本の本文は、次のとおりである。⁽¹⁰⁾

【三巻本】(二八五)

十二月二十四日、宮の御仏名の半夜の導師聴きて出づる人は、夜なかばかりも過ぎにけむかし。

日ごろ降りつる雪の今日はやみて、風などいたう吹きつれば、垂氷いみじうしだり、地などこそむらむら白きところがちなれ、屋の上はただおしなべて白きに、あやしき賤の屋も雪にみな面がくして、ありあけの月のくまなきに、いみじうをかし。白銀などを葺きたるやうなるに、水晶の滝などいはましやうにて、長く、短く、ことさらにかけわたしたると見えて、いふにもあまりめでたきに、下簾もかけぬ車の、簾をいと高うあげたれば、奥までさし入りたる月に、薄色、白き紅梅など、七つ八つばかり着たる上に、濃き衣のいとあざやかなるつやなど月にはえて、をかしう見ゆる、かたはらに、葡萄染の固紋の指貫、白き衣どもあまた、山吹、紅など着こぼして、直衣のいと白き、紐を解きたれば、脱ぎ垂れられていみじうこぼれ出でたり。指貫の片つかたは、軾のもとに踏み出だしたるなど、道に人あひたらば、をかしと見つべし。

月の影のはしたなきに、うしろざまにすべり入るを、つねにひきよせ、あらはになされてわぶるもをかし。「凜凜として氷鋪けり」といふことを返す返す誦じておはするは、いみじうをかしうて、夜一夜もありかまほしきに、行くところの近うなるもくちをし。

【能因本】(二八二)

十二月二十四日、宮の御仏名の初夜、御導師聞きて出づる人は、夜中も過ぎぬらむかし、里へも出で、もしは、しのびたる所へも夜のほど出づるにもあれ、あひ乗りたる道のほどこそをかしけれ。

日ごろ降りつる雪の、今朝はやみて、風などいたう吹きつれば、垂氷のいみじうしだる。土などこそ、むらむら黒きがちなれ、屋の上はただおしなべて白きに、あやしき賤の屋も面隠して、有明の月の隈なきに、いみじうをかし。しろがねなどを葺きたるやうなるに、水晶の岫など言はましきやうにて、長く短く、ことさらにかけわたしたると見えて、言ふにもあまりめでたき垂氷に、下簾もかけぬ。いと高く簾を上げたれば、奥までさし入りたる月に、薄色、紅梅、白きなど、七八ばかり着たる上に、濃き衣のいとあざやかなるつやなど、月に映えてをかしう見ゆるかたはらに、葡萄染の固紋の指貫、白き衣どもあまた、山吹、紅など着こぼして、直衣のいと白き紐を解きたれば、ぬぎ垂れられて、いみじうこぼれ出でたり。指貫の片つ方は、とじきみの外に踏み出だされたるなど、道に人の会ひたらば、をかしと見つべし。月影のはしたなきに、うしろざまへすべり出でたるを、常に引き寄せあらはになされてわぶるもをかし。「凜々として氷鋪けり」といふ詩を、かへすがへす誦んじておはするは、いみじうをかしうて、夜一夜もありかまほしきに、行く所の近くなる、くちをし。

三卷・能因兩本では、冒頭、「十二月二十四日」の、「宮の御仏名」の「初夜」ないし「半夜」の読経の後の夜の情景であることを断っており、「十二月十日」を描く前田本は、それとは大きく乖離し、諸所における表現の径庭も枚挙に遑なきこと、見られるとおりだが、以下、少しく仔細に辿ってみよう。

師走の月下の同車行を描いた当段は、前半の冒頭から数行のところ、いわば総論に相当しそうな行文、すなわち前田本では「里へまれ、もしは、夜のほど忍びて出づるにもあれ、相乗りたる車のほどこそ、をかしけれ」、能因本では「里へも出で、もしは、しのびたる所へも夜のほど出づるにもあれ、あひ乗りたる道のほどこそをかしけれ」とあるそれを、なぜか三卷本は持たないという差異を見せる。その一方で、三卷・能因の兩本は、地面や屋根に降り敷いた雪、軒端に長短さまざまに掛かる氷柱の活写を口切りに、月光に照らし出された、冴えきった明澄感のあふれる空間を描出して、さて同車の男女の衣裳・姿態、さらに吟誦へと移ろってゆく、いふなれば美的にして整然たる筆さばきが確認できるのに対して、前田本は、地面―衣裳―総論―屋根―氷柱―吟誦と経て後半へと展がるという恰好で、〈屋根〉を描く筆も〈氷柱〉のそれも、三卷本・能因本の筆の入れ方に比べれば、ずいぶんと浅少である。

しかるに、後半、「若き人の」以下の段落は、三卷本を引けば、「月の影のはしたなさに、うしろざまにすべり入るを、つねにひきよせ、あらはになされてわぶるもをかし」といったあたりを敷衍したように、その筆はふくよかである。

尤も、「はしたなさに」に看取されるように、三卷本や能因本の記述が清女自身の体験であることを滲ませているのに対して、前田本は客観的なスケッチといった体裁に拠っており、文体の差異もまた歴然である。

さらには、後段すなわち掉尾の四行の、「年老い」てなお「相乗る」ことへの想察は、三卷本・能因本には悉皆見出し得ないという恰好なのである。

さて、ならば堺本はどうか。引いてみよう。⁽¹⁾

【堺本】〔二二五〕

十二月十日よひの月いと明かきに、日ごろ降り積もりたる雪の、凍み固まりたるが、空はやみたれど、なべて白く見えわたりたるに、直衣いと白く、指貫濃き人の、色々の衣どもあまた着て、片つ方の袴に踏み出だしたるが、かたはらに白き衣ども、濃き綾の

あざやかなる上に着て、簾^{すだれ}高やかに上げて、里へまれ、もしくは、夜のほど忍びて出づるにまれ、相乗りたる車は道のほどこそ、をか
しけれ。

例はいときたなげに見ゆる家どもも、雪に面隠して、銀を葺きたらむやうに、おしなべて、世の端々には、垂氷の長く短くつやめ
きて見えたる、なほいとをかしと見ゆくに、「月千里に明らかなり」といふことを声のかぎり誦じたるは、さらに琴・笛の音よりも
をかしく、めでたし。

若き人の、髪うるはしくかかりたる、搔練のつやにもわかれず、額髪のはざまより見えたる面つき、いとふくらかに、頤の下、も
のより殊に白う見えたるなど、鴟の尾の方より射し入りたる月影に見るかひあれば、片つ方の袖どもは一連のやうに貫きなして搔
寄せて、ものなど言ひ行くは、やがて千夜も尽くしつべくおぼえぬべきわざなり。

年老い、顔にくげに、鬢などしたると、なほそのをりにさだに相乗る人あらば、飛びつきぬべき心地こそすれ。わいても、人やり
ならず、「あな、心づき」など見おこせむ尻目こそ、ことに心地わびしかりぬべけれ。

見られるとおりである。前田本は、先に引いた三卷本・能因本からはあまりに遠く、この堺本とは限りなく近似しているのである。
旧説が、前田本は底本たる能因本・堺本両々全部を解体し、両方を対照して、共通しない部分はすべて採用し、共通するところは一
々判断して採択し稀に校訂を加え…と説き来たったところには、とうてい当て嵌まらぬ本文の様相が目につくばかりであろう。

畢竟、当段の本文のこうしたありよう、改めて言えば、前田本の三卷本ないし能因本からの遠大な距離、一方で、ほぼ同文にも映
る堺本との濃密といつてよいほどの近さから浮上するのは、殊に前田本本文7行目の「月千里に明らかなり」と三卷本・能因本のう
しろから4行目の「凜凜として氷鋪けり」との異同が象徴的に物語っているというべく、三卷本・前田本なる本文から堺本・前田
本なる本文への、あるいはその逆への、改修の跡の厳存であつて、卑見によれば、それが出来た可能性は雑纂形態本から類纂形
態本が再編される際に求められようこと、先にも、また前稿においても述べたとおりである。

ところで、汎諸本論によれば、もはや問うべき必要なことながら、なお一言しておきたいのは、堺本・前田本間の異同についてで
ある。

右に引いた堺本本文中の施線部が前田本との異同箇所である。煩瑣を避け、いま一々をあげつらつての比較の跡をここに引証する

ことは節するけれども、語彙・語法の如何、あるいは文意の通行は温順か否か、といった観点からするに、前田本に対する堺本の劣位は明らかである。⁽¹³⁾たとえば堺本本文5行目の「…、銀を葺きたらむやうに、おしなべて、世の端々には、…」や掉尾の「…、ことら心地わびしかりぬべけれ」などは、その行文とその文意のあり得べきところ、前田本の伝えた本文なくして知るよしもなかったのではあるまいか。説かれてきた、前田本が堺本を参照したという把握とは正反対のそれは、ほんとうにあり得ないのであるうか。施線部の大半が堺本系統内における異同を抱え込んでいる事実についても、参照されたのではなく参照した側の本文であるがゆえに生じた揺れであるとの説明がつくものと考えるのが、いかがであろうか。

それとも、またぞろ、前田本は堺本の「源流本」を伝えているのだ、という論法が講じられるのであろうか。それならばそれで、その本文をこんにちに現に伝えている前田本の存在意義は、ますます高いということになる理窟ではないか。

前田本は、やはり、その取り扱いを誤られてきたのである。

四 前田本を読む／前田本で読む／二二六段の場合

【二二六】

【本文】

内裏の局は、細殿こそをかしけれ。夏は、上の葎あげたれば、風いみじう吹きて、いと涼し。冬は、雪・霰などの、風にたぐひて降り入りたるも、いみじくをかし。狭くて、童なども、屏風の後ろに隠しすゑたれば、異所のやうにうちとけて声高く笑わらひなどもせぬ、いとよし。

昼も、人の立ち寄らぬをりやはある。まれに見えぬをりも、いまや来むと心づかひせらる。夜はた、ましてうちとくべきやうもなし。かならず人あらむとのみおぼえてたゆまぬが、いと

【通釈】

宮中の女房の局といえ、他でもない細殿が情趣に富む。夏は、上の葎を上げてあるので、風がよく吹き入って、とても涼しい。冬は、雪や霰などが、風と一緒にたぐひて降り込んできたりするのも、たいそう趣がある。狭いので、子供なども、屏風の後ろに気づかれないようにに坐らせておけば、他の場所の局のように羽目を外して大きな声でわつたりなどしないのが、とてもよい。

昼はもう、人が立ち寄らぬ折などない。たまたま誰も見えないときも、いましも来るのではと気がかりになる。夜は夜で、より寛げるはずもない。きっと誰かが来るとばかり気になって緊張感がずっと解け

をかしきなり。

沓の音の夜一夜聞こゆるが、立ちとまりて、指ただ一つして叩くに、その人と、ふと聞き知らるるこそ、をかしけれ。いと久しく叩くに、音もせねば、寝たるとや思ふらむとねたくて、すこしうちみじろく衣のけはひを、さならむと思ふらむかし。冬は、火桶にやをら立する箸の音のしのびたりと思へど、聞こゆるにや、いとど叩けば、懸けながら、「やをらすべり寄りて」など言ふをりもあり。

また、あまたが声して、誦じて歌ひなどするをりは、叩かねど先づ開けたれば、来むとしも思はざりける人も立ちとまりて、物語などしつきぬるをりは、やがてみ明かしてやむも、いとをかし。

簾のいと青きに、几帳の帷子あざやかにて、袖口・裾・棲このもしくうち重なりて見えたるに、直衣の後ろほころび絶えず着たる君達の、色々の衣こぼし出でたるが、簾をおし入れて、半らは入りたるやうなるを、外より見るは、をかしからむかし。きよげなる硯ひき寄せて、文書き、もしは鏡乞ひ出でて、鬢かきなほしなどするも、すべてをかし。

六位の藏人の青色などにて、うけばりて、遣戸のもとにそば寄せては、え立たず、塀のかたにうしろおして、袖うちあはせがちなるこそ、をかしけれ。

細殿の口は、三尺の几帳を立てたるに、樋の下ただ簾越ぞあ

ない、そこが何とも妙味なのである。

沓の音が夜通し聞こえるのだが、その中の誰かの足が止まって、指のただ一本で戸を叩くと、あの男だと、女のほうでは聞いてすぐに分かるのは、おもしろいものだ。男がずいぶん長いこと叩いているのに、物音もしないと、寝ていると男が思うのではと女は口惜しくて、すこし身動きするその衣擦れの音から、起きていようだと男は察しているのであらうよ。冬は冬で、火鉢にそつと刺す箸の音が立たないようになっていると女のほうでは思っても、聞こえているのであろうか、男がいよいよ強く戸を叩くので、女は戸を開けないまでも、「静かに寄つて」などと言う場合もある。

あるいは、大勢の聲がして、詩を朗誦したり歌を謡つたりなどしている時は、叩かないでもこちらから開けたりすると、この局に来ようとは思つていなかった人も立ち寄つて、四方山話などし尽くしてしまつた場合には、そこで坐つたまま夜を明かしてしまふのも、とても風流だ。

簾が真つ青なうえに、几帳の帷子が色鮮やかで、袖口や裾や棲が感じよく重なつて女物の衣裳が掛けてあるのが見えているところで、直衣の後ろを常に縫い合わせないままに着て、様々な色合いの着物を直衣の下から出した貴公子たちが、戸口の簾を中に押し入れて、その半身は局の中に入つたような恰好を、外から見るのは興味をそそであるうよ。きれいな硯を近くにして、手紙を書いたり、あるいは鏡を借り出して、鬢を梳き直したりなどするもの、総て興がわく。

六位の藏人が青色の着物を着て、わがもの顔で引戸のそばに身を寄せては立つこともできず、塀のほうに背をもたせて、両袖を前で合わせがちなのは、おもしろい。

細殿の戸口は、三尺の几帳を立ててあつて、樋のすぐ下に簾越になつていところがある、そこに、外でその樋の下に立っている男たち、

る、それに、下に立てる人びと、うちにゐたる人びと、もの言ふ顔のいとよくあたりたるこそ、をかしけれ。丈いと高く短からむ人や、いかがあらむ。なほ、世の常の人は、さのみぞある。

例によつて、当段に対応する三卷本・能因本を掲げるが、それぞれの行文は次のとおりである。

【三卷本】〔七二〕

内裏の局、ほそ殿いみじうをかし。上の蔀あげたれば、風いみじう吹き入りて、夏もいみじう涼し。冬は雪、霰などの風にたぐひて降り入りたるも、いとをかし。せばくて、童などのぼりぬるぞあしけれども、屏風のうちに隠しすゑたれば、ことどころの局のやうに声高くえ笑ひなどもせで、いとよし。

昼などもたゆまず心づかひせらる。夜はまいてうちとくべきやうもなきがいとをかしきなり。沓の音夜一夜聞ゆるが、とどまりて、ただおよび一つしてたたくが、その人なりとふと聞ゆるこそをかしけれ。

いとひさしうたたくに音もせねば、寝入りたりと思ふらむとねたくて、すこしうちみじろぐ衣のけはひ、さななりと思ふらむかし。冬は火桶にやをら立つる箸の音ものびたりと聞ゆるを、いとどたたきはらへば、声にてもいふに、かげながらすべりよりて聞くときもあり。

また、あまたの声して詩誦じ、歌などうたふには、たたかねど、まづあけたれば、ここへとしも思はざりける人も立ちどま

局の中に坐っている女房たち、話をするその双方の顔がちようどうまくあたっているのが、興味深い。背が高すぎたり低すぎたりするような人は、どうなのであろうか。やはり、世間普通の人というのは、もっぱらそうなるものなのだ。

【能因本】〔七八〕

うち局は、細殿いみじうをかし。かみの小蔀上げたれば、風いみじう吹き入れて、夏もいと涼し。冬は雪、霰などの、風にたぐひて吹き入りたるも、いとをかし。せばくて、童などのぼりゐたるもあしければ、屏風のうしろなどに隠しすゑたれば、こと所の局のやうに、声高くえ笑ひなどもせで、いとよし。昼などもたゆまず心づかひせらる。夜はたまして、いささかうち解くべくもなきが、をかしきなり。

沓の音の夜一夜聞ゆるがとまりて、ただ指一つ一つしてたたくが、その人なりと、ふと知らるるこそをかしけれ。いとひさしくたたくに、音せねば、寝入りにけるとと思ふらむねたく、すこし身じろく音、衣のけはひも、さななりと思ふらむかし。扇など使ふもしるし。冬は火桶にやをら立つる火箸の音も、しのびたれど聞ゆるを、いとどたたきまさり、声にても言ふに、陰ながらすべり寄りて聞くをりもあり。

また、あまたの声々して歌などうたふに、たたかねど、まづあけたれば、ここへとしも思はぬ人も立ちとまりぬ。入るべき

りぬ。

入るべきやうもなくて立ち明かすもなほをかしげなるに、几帳の帷かたむすいとあざやかに、裾のつまうちかさなりて見えたるに、直衣のうしろにはころびたえすきたる君達、六位の藏人の青色など着て、うけばりて遣戸やうどのもとなどにそばよせてはえ立たで、へいのかたにうしろおして、袖うちあはせて立ちたるこそをかしけれ。

また、指貫いと濃う、直衣あざやかにて、色色の衣どもこぼし出でたる人の、簾すをおし入れてなかりたるやうなるも、外より見るはいとをかしからむを、清げなる硯すずり引き寄せて文書き、もしは鏡こ乞ひて見なほしたるは、すべてをかし。

三尺の几帳を立てたるに、帽額もがくのしもただすこしぞある、外に立てる人とうちにゐたる人ともいふが、かほのもとにいとよくあたりたるこそをかしけれ。たけの高く、短からむ人などやいかがあらむ。なほ世のつねの人はさのみあらむ。

さて、この両本と前田本との異同の位相は様々である。以下、冒頭から順を追つてその主なところを摘記しておきたい。

前田本本文6行目、二つ目の形式段落にあたるところ、たとえば三卷本は、「昼などもたゆまず心づかひせらる。夜はまいてうちとくべきやうもなきがいとをかしきなり。」と、前田本に比していえば、簡素淡泊である。また、「たゆむ」（たゆまぬ／たゆまず）の用いられた文脈も、「昼」と「夜」とが交差している。

10行目の「立ちとまりて」は、三卷本は「とどまりて」、能因本は「とまりて」と、また、その後の、「その人と、ふと聞き知らるこそ」についても、三卷本「その人なりとふと聞ゆるこそ」、能因本「その人なりと、ふと知らるこそ」と、ニュアンスが異

やうもなくて立ち明かすもなほをかし。御簾のいと青く、をかしげなるに、几帳の帷子いとあざやかなる、裾のつますこし見えたるに、直衣のうしろに、ほころびすきたる君達、六位の藏人、青色などにて受けばりて、遣戸のもとなどにはそばよせてえ立たらず、堀の前などにうしろおして袖うち合はせがちなるこそをかしけれ。

また、指貫いと濃う、直衣あざやかにて、色々の衣どもこぼし出でたる人の、簾をおし入れて、なから入りたるやうなるも、外より見るはいとをかしからむを、清げなる硯引き寄せて文書き、もしは鏡乞ひて見なほしたるは、すべてをかし。

三尺の几帳を立てたるに、帽額の下ただ少しぞある、外の立てる人と内にゐたる人と物いふが、顔のもとにいとよくあたりたるこそをかしけれ。たけの高く、短からむ人などや、いかがあらむ。なほ世の常の人はさのみあらむ。

なる。

15行目、「いとど叩けば、懸けながら、『やをらすべりよりて』など言ふをりもあり」は、三卷本では「いとどたたきはらへば、声にてもいふに、かげながらすべりよりて聞くときもあり」、能因本では「いとどたたきまさり、声にても言ふに、陰ながらすべり寄りに聞くをりもあり」と、三卷・能因両本間の差異の小ささと同時に、前田本が独自の文脈を形成していることが知られる。

また19行目の「物語などしつきぬるをりは、やがて明かしてやむも」についても、三卷本は「入るべきやうもなくて立ち明かすも」、能因本も「入るべきやうもなくて立ち明かすも」と、両本は同文であるのに対して、前田本は独自である。

21～29行目の「君達」と「六位の藏人」に係る文脈もまた、三卷本・能因本のそれとは大きく異なる。すなわち、23～26行目の「色々の」をかしからむかし。きよげなる：すべてをかし」と、27～29行目の「六位の藏人の」をかしけれ」とが、三卷本・能因本においては全く入れ替わった恰好である。「色々の」以下が新たに立ち上げられる両本の文脈のありように比して、前田本の整然たるそれを多としたいと考えるのだが、かく相違する本文の出来した由縁については、先の「(二二七)」の場合と同様の想定が可能なのかどうか、堺本を引こう。

【堺本】「(二三六)」

内裏の局は、細殿こそをかしけれ。夏は、上の蔀を上げたれば、風いみじく吹きて、いと涼し。冬は、雪・霰の、風にたぐひて降り入りたるも、いみじうをかし。狭くて、童^{①わらわ}などののぼるこそあしけれども、屏風の後ろに隠しすゑたれば、異所のやうにうちとけて声高く笑わらひなどせぬ、いとよし。

昼も、人の立ち寄らぬをり^②はある。まぎれに見えぬをりも、いまや来むと心づかひせられ。夜はた、ましてうちとくべきかたなし。かならず人あらむとのみおぼえてたゆまぬが、いとをかしきなり。

沓の音の夜一夜聞こゆるが、立ちとまりて、指ただ一つして叩くに、その人と、ふと聞き知らるこそ、をかしけれ。いと久しう叩くに、音もせねば、寝たるとや思ふらむとねたくて、うちみじろく衣のけはひを、さならむと思ふらむかし。冬は、火桶にやをら立つる箸の音、しのびたると思へど、聞こゆるにや、いと叩けば、やはらすべり寄^③りて物など言ふをりもあり。

また、あまたが声して、物誦^④じ、歌うたひなどするをりは、叩かねど先づ開けたれば、来むとしも思はざりける人も立ちとまりて、

物語などしつきぬるをりは、やがて明かしてやむも、いとをかし。

簾のいと青きに、几帳の帷子あざやかにて、簾のつまこのましく、^⑤うち重なりて見えたるに、直衣の後ろほころび絶えず着たる君達の、色々の衣こぼし出でたるが、簾おし入れて、半らは入りたるやうなるを、外より見るは、をかしからむかし。きよげなる硯ひき寄せて、文書き、もしは鏡乞ひ出でて、鬢かきなほしなどするも、すべてをかし。

六位の藏人の青色などにて、うけばりて、遣戸のもとにそば寄せては、え立たず、堀のかたにうしろおして、袖うちあはせがちなるこそ、をかしけれ。

細殿の口は、三尺の几帳を立てたるに、樋の下ただ簾越ぞある、それに、下に立てる人びと、うちにゐたる人に言ふ顔の、いとよくあたりたるこそ、をかしけれ。^⑦丈いと短く高からむ人や、いかがあらむ。なほ、世の常の人は、さのみぞある。^⑥

さて、いかがであろうか。一見して知られるとおり、総じて言えば前章で確認した「二二七」と同様、やはり雑纂形態本対類纂形態本という対立の構図の中で捉えるべき本文状況であることは確かであろう。要するに、当段についても堺本と前田本とは近似類同の本文を有している、ということである。

しかるに、事はどこまでも単純というわけではない。いま、右の堺本本文中に線部を施した箇所は、いずれも前田本との異同を包含しているのだが、その数こそ少なくはあれ一つひとつは必ずしも小さくはないそれらを仔細に閲するところから見えてくるのは、さわめて興味深い事実である。

たとえば①は、「童なども」に作る前田本はもとより、「童べなどののほりゐたるもあしければ」と伝える能因本とも径庭があるなかで、三巻本の「童べなどののほりぬるぞあしけれども」に近く、④についても、「歌などうたふ」（能因本）や「誦じて歌ひ」（前田本）よりは三巻本の「詩誦じ、歌などうたふ」に通い、さらに⑥などは、前田本とははっきりと離れ、ともに「内にゐたる人と物いふ」に作る三巻本・能因本に沿う体なのである。

すなわち、当段においてもやはり、旧説が、前田本は底本たる能因本・堺本両々全部を解体し、両方を対照して、共通しない部分はすべて採用し、共通するところは一々判断して採択し稀に校訂を加え……と説き来たったところはおよそ当て嵌まらず、さらに言えば、少なくとも当段に関する限り、三巻本をも参照していたのは前田本というよりはむしろ堺本である、とさえ言えよう。

かくて、能因本と堺本との合成本であると信じ（させ）られ、事実上、要なきものとして見限られてきた前田本は、いまこそ或る種の偏見から解放され、救われ、読まれねばならない。正対はおろか見向きもされぬままに今日に至らされた言葉や表現、語彙や語法の中に、未だ気づかれざる枕草子的なるものがさらに潜在しつづけるままになるとしたら、私たちにとって、また歴史にとつて、いや何よりも『枕草子』にとつて、それほどの不幸はあるまい、そうかんがえているところである。

〔注〕

- (1) 拙稿『枕草子』を前田本で読むということ——いわゆる共通テストの向こう側へ、もしくは多様なものたちへのまなざし——（『教育・研究』第33号、二〇二〇年三月）。
- (2) 田中重太郎『新註枕冊子新註』（古典文庫、一九五一年）の「解説」の三「前田本枕冊子の本質」（四一四～四一八頁）を参照されたい。
- (3) 『枕草子』伝本研究の現段階（『月刊文法』第三巻第四号、一九七一年二月）。なお、『校本枕冊子』は、上巻が一九五三年、下巻が一九五六年、付巻が一九五七年、いずれも古典文庫刊、『枕冊子本文の研究』は、一九六〇年、初音書房刊、である。
- (4) 「諸本論とのつきあい方——平家物語語研究をひらく——」（『中世文学』60巻、二〇一五年六月）。
- (5) 日本古典文学全集第35回配本第11巻『枕草子』月報（一九七四年四月）所収。
- (6) 以下、前田本の章段番号は、便宜上、田中重太郎『新註枕冊子新註』（古典文庫、一九五一年）に従う。
- (7) 『堺本枕草子の研究』（武蔵野書院、二〇一六年）第Ⅱ部第七章「堺本・前田家本における『白氏文集』受容——堺本の随想群と『和漢朗詠集』——」参照。
- (8) 「枕草子評註——六音と聲の美——」（『国文学解釈と鑑賞』第十二巻第八号、至文堂、一九四七年八月）。
- (9) 『全講枕草子下』（至文堂、一九五七年）六〇四頁参照。
- (10) 以下、三巻本の本文ならびに章段番号は、田中重太郎著『校注枕冊子』（笠間書院、一九七五年）に、また、能因本の本文ならびに章段番号は、便宜上、松尾聰・永井和子校注・訳『枕草子 一・二』（完訳日本の古典第12・13巻、小学館、一九八四年）に拠る。
- (11) 以下、堺本の本文は、吉田幸一編『堺本枕草子斑山文庫本』（古典文庫、一九九六年）に拠り、私に句読点を加点し、適宜、仮名に漢字を当てるなど一般的な校訂を施して掲出する。ただし、章段番号は林和比古編著『堺本枕草子本文集成』（私家版、一九八八年）に拠る。
- (12) 山脇毅『枕草子本文整理札記』（山脇先生記念会、一九六六年）は、楠道隆『枕草子異本研究（下）——類纂形態本考証——』（『國語・國文』一九三四年七月）が、「（雑纂本カラ堺本ヘノ）全く巧みな改作振りであるが、原作者の作為で内ない事は、その中に使用された素材（語句及感覚美）をそのまゝ採用してゐる無能ぶりから明かである」と説いたのに対して、

堺本が後人の改作になるものとは、全く考へられない。たゞこの段は、作者が、冬の夜、男と相乗りした経験として書いてゐるのではなく、さういふ境地を空想し、創作してゐるのである、経験の有無は、こゝでは問題にしないでよい、だから氣に入らなければ、添削もしよう、又書きなほしようと考えて居る。

と述べている（同書五九節）。雑纂形態本から類纂形態本への改修・改編に際して、清女の心の内は、その具体はそれとして、自在であつただけは言えようというのが本稿の立場である。

(13) 山中悠希は、注(7) 所掲書の第Ⅱ部第八章「雪月花」と「車」の景の再構成——「十二月十日よひの月いと明かき」の段と一連の随想群をめぐつて——において、

三巻本・能因本のような本文から堺本文という流れが認められ得るものと思われる。また、こうした堺本の再構成行為は相当の工夫と趣向を凝らして行われているものと思われる。こうした堺本のありようを見ていくことは、『枕草子』生成の営みを再確認することでもあるだろう。

と述べている。三巻・能因両本対堺本という枠組においては、まことに肯うべき考察だが、同論は論理展開の主軸・趣旨を重視する都合からか、当章段についての堺本文と前田本文との比較検討は埒外に置いている。いま、まさにその点への視座を設けてみた結果として、右の山中の言説の中の「堺本」を悉皆「前田本」へと置換し得るであろうというのが本稿の判断であり、立場でもある。

(14) ここは、三巻本・能因本では一般に「帽額の下た少しぞある」と整理し、およそ疑いを入れることなく「簾の帽額の下と几帳の間にほんのすこしあきがある」（石田穰二／角川ソフィア文庫）、「ほんの少しすき間がある」（萩谷朴／新潮日本古典集成）といった解釈が行なわれてきた。本稿の立場からは、雑纂形態本の伝える「帽額」が類纂形態本の伝える「樋」へと、より精確を期して改修されたと見られ、それ自体いかにも興味深いところだが、いま問いたいのは、「あき」や「すき間」は、本文のいずれの文字列に対応するものであつたのか、という点である。いわば状況証拠的にそこに「ある」ものとして捻出されたと思えないのである。試みに、「すこし」に「簾越」を当てる所以である。「簾越」は、『後撰集』に「人のもとにまかれりけるに、簾の外に据ゑて物言ひけるを、簾を引き上げれば、いたく騒ぎければ、まかり歸りて、またの朝につかはしける／荒かりし浪の心はつらけれどす越しに寄せし声ぞ恋しき」（巻第十一・恋三・七四七／藤原守正）とある。『枕草子』の当該箇所の文脈では、簾越になつてゐるところ、かなりの意味合いであろうと読む。なお、ついでに言い添えれば、この、「…ぞある」の直後に「それに」を有し、「…あたりたる」がそれを承ける、前田本・堺本という類纂形態本のみが有する構文こそ、「…簾越になつてゐるところがある、そこに、外と内とから語らう男女の顔が（位置として）ぴったり当たる」との意味ないし情報を伝えるに十全であろうとは指摘しておきたい。